

“つながり、支えあう社会” をめざした活動を展開していく

高橋しげゆき市議（盛岡市）

『東日本大震災』で岩手県沿岸部は、大津波で何もかも流されました。一方で、盛岡市をはじめ内陸部では被害も少なかったのですが、内陸部で生活している人の中にも沿岸部出身者が多く、復旧・復興への強い気持ちは、皆同じです」と話すのは、アピール21会員であり、NTT労組自治体議員である高橋重幸盛岡市議だ。

いま岩手県沿岸部で家屋を失った人たちは、避難所生活から、仮設住宅へと移りつつある。そんな折、高橋市議はあることに気がついた。

「所属しているライオンズクラブを通じて、全国からカレンダーをかき集め、避難所や



仮設住宅に配布したんです」と高橋さんは当時を振り返る。

仮設住宅では、被災者は必要最小限の生活用品で暮らしており、入居したどの家にもカレンダーが無かった。今日が何月・何日・何曜日なのかを気にすることなく、この5ヵ月間、避難生活に追われる日々であったことがうかがい知れる。

「悲しみに暮れながら、ただ毎日を過ごすよりも、時を刻むのと同じように日・週・月をという時の流れを意識し、生活時間の目安や復興の経過を実感しながら生活する方が、明日への希望につな

がるはずです」と高橋市議は言う。仮設住宅の壁に掛けられたカレンダーには、今は未来に向かった予定がいっぱい書き込まれているのがとても嬉しいと話す。

そんな高橋議員は、連合「救援ボランティア」が宮古で活動した際、一週間ほど、ボランティアの受け入れ支援を行なった。重労働で帰ってくるボランティアのため、毎日、食事の用意や清掃などを行なった。

「実は、今回の震災で私自身も親戚が行方不明になっています。母の実家は釜石市の隣の大槌町です。発災後、何度も足を運びましたが、瓦礫と泥で、何もできませんでした。ですから、連合救援ボランティアの皆さんが瓦礫の撤去や泥出し作業にあたると聞いて、いてもたってもいられず、少しでもバックアップしたいと思ったんです」と高橋さん。

自らも震災で受けたつらい体験を抱える高橋さんは続けて語る。

「今後のボランティアの受け入れ先は、大船渡や釜石の仮設住宅での活動が中心になるでしょう。陸前高田市は壊滅的な状態で、復興作業は重機を使う作業が中心ですから」。

これからも、“つながり、支えあう社会”をめざした活動を展開していくと話す高橋議員。県庁所在地として盛岡市がしっかりと構えることが重要です。その県都・盛岡の市議会議員として、岩手の着実な復興・再生へのリーダーシップを発揮していくことに全力を投げたいと、熱い思いを語ってくれた。